

[原 著]

D. クラマーが日本のサッカーの競技力向上に及ぼした影響 (1945～1970)

—戦後日本におけるサッカーの技術史研究の一環として—

青 山 健 太*

(2007 年 10 月 29 日受付, 2008 年 2 月 8 日受理)

Effect of Dettmar Cramer on the Progress of Competitive Performance for Japanese Soccer (1945-1970)

—As a Part of Study on the Technical History of
Japanese Soccer after World War II—

Kenta AOYAMA

This study makes it obvious about the accomplishment that Dettmar Cramer, who was the foreign coach invited as the director of national team for Tokyo Olympics, did for the Japanese soccer history after World War II.

The first, it makes obvious that a situation of Japanese soccer before Tokyo Olympic here.

Second, this study refers to the detail of the coaching method of Tokyo Olympic and that of Dettmar Cramer as the director of national soccer team.

Third, it makes clear that his activity in Japan and confirmed the contents of his "five proposals."

Last, the process of the foundation of Japan soccer league that was one of the "five proposals" and the result of Mexico Olympic (acquisition of bronze medal).

The 1st FIFA coaching school for Asians coaches was produced by Dettmar Cramer in 1969.

Japanese coaching school was held by Japan football association in 1970.

This coaching school was effect by Dettemar Cramer.

The players and leaders played in the Tokyo and Mexico Olympic were his students.

Students of Dettemar Cramer were greatly related to an establishment of J league today. It is important view that Dettemar Cramer and his students assumed a great role for Japanese soccer history after World War II.

Key words: Dettmar Cramer, soccer, technical history

キーワード: D. クラマー, サッカー, 技術史

1. 本稿の意図と着眼点

近年の日本サッカー界の国際競技力の向上については、誰もがその戦績から理解することができる。例えば、FIFA ワールドカップ (以下 W 杯) アジア予選を突破した日本代表チームは、1998 年の第 16 回フランス大会から 2006 年第 18 回ドイツ大会まで 3 大会連続で本大会出場を果たしているし、オリンピック代表チームは、1996 年の第 26 回アトランタ大会から 2004 年第 28 回アテネ大会まで同じく連続 3 大会出

場を成し遂げ、国際舞台において着実にその地位を築き始めているのである¹⁾。

こうした日本サッカー界の目覚ましい活躍ぶりには、1991 年 11 月の社団法人日本プロサッカーリーグ (以下 J リーグ) の設立²⁾によるところが大きく、いわゆるプロ化が競技力の向上に果たした役割は少なくはない。なぜなら、J リーグ発足後の代表チームは、その大半が J リーグに所属する選手 (プロ) で構成され、国際試合 (アジアカップ, オリンピック, ワールドカッ

* 体育研究所

ブ等)において常時優秀な成績をおさめるまでになったからである³⁾。

日本サッカー界の国際競争力を飛躍的に進展させた要因の一つに挙げられるこのJリーグ(プロサッカーリーグ)は、周知のとおり1965年6月に開幕した日本サッカーリーグ⁴⁾を母胎としている。これは、第18回オリンピック東京大会(1964年)当時の日本代表チームを強化すべく日本蹴球協会がコーチとして招聘した⁵⁾西ドイツ(当時)西部サッカー協会の専任コーチであったD. クラマー(Dettmar Cramer, デュイスブルクトレーニングセンター所属)の提言により設立されたものである⁶⁾。

東京オリンピックに向けて、日本蹴球協会は東京オリンピック選手強化対策本部からの指示により、1960年からの4年計画で「国際交流」「国外派遣」「指導者育成」という具体的な強化策を打ち出した。その一環としてW杯優勝経験のあるサッカー強豪国、西ドイツからD. クラマーをコーチとして招聘したのである⁷⁾。

彼は、日本代表チームを世界トップレベルにまで強化するには日本サッカー界全体の改革が必要であることを訴え、同時に当時の日本サッカー界が抱える諸問題を解決するために具体的な方策を示しながら国内での活動を積極的に展開していった。

東京オリンピックの終了とともに退任することとなったD. クラマーは、離日(帰国)にあたり、日本サッカー界の新たな飛躍を期待し、いわゆる「五つの提言」を残した。日本蹴球協会は彼のこの提言に基づき、様々な改革を断行していったのである⁸⁾。

日本蹴球協会の取り組みの中でも最も顕著な成果は、第19回オリンピックメキシコ大会(1968年)での日本サッカー界史上初となる銅メダル獲得であった。しかしながらこのメキシコ大会での活躍を境に、以後日本代表チームはオリンピックやW杯などの国際舞台でその雄姿を披露することができなくなったのである。

このような低迷から脱却すべく、日本サッカー協会は当時アマチュアリーグであった日本サッカーリーグのプロ化を模索し、国際競技力の向上を目指してJリーグの結成へと進んでいくのである。このサッカーリーグのプロ化を推進し、Jリーグ設立の中心的役割を担ったのが、東京およびメキシコオリンピック当時、D. クラマーから直接指導を受けた選手やスタッフであったのである⁹⁾。

このようなことから今日の日本サッカー界の発展(国際的競技力の向上)を語る上で、D. クラマーは欠くことのできない存在であったといっても過言ではない。つまり、彼の日本における技術指導をはじめとす

る様々な活動(取り組み)に照準を定めて、それを詳細に分析することは、同時に戦後の日本におけるサッカーの技術史の側面を明らかにすることにつながり、その意義は大きいと言えるだろう。

ところが、こうした視角から従前のサッカーの技術史研究を眺め返してみるとその蓄積は非常に少ないことがわかる。多くは、サッカーの技術および戦術指導に関する事例報告で特定の基礎的技術(ヘディング、キックなど)や戦術(オフサイド、ゴールキーパーなど)に絞って、それがどのように変化していったのかについて検討・分析を加えたもので¹⁰⁾、本稿で取り上げようとするようなあるコーチング理論(D. クラマーの指導理念とその実際)が、日本サッカー界の競技力向上にどのような影響を及ぼしたのかについて、論究しようとする試みはあまり行われてこなかったのである。

しかしながら、わずかに多和健雄の論稿¹¹⁾に日本にサッカーが移入されてから1968年のメキシコオリンピックまでの間の技術の変遷に着目した記述をみることができる。ここでは、第一に草創期のサッカー技術として、1870年代に初めて日本に紹介された当時の代表的戦法として「キックアンドラッシュ」戦法が紹介され、やがて国際大会等に出場することにより外国チームから新たな技術・戦術を学んだり国内大学チームを中心に新たな技術・戦術の開発が進められたと指摘している。さらには、東京オリンピック(1964年)を控えた日本サッカー界がD. クラマーをコーチとして招聘し、最先端の技術・戦術を積極的に採り入れ、ついには1968年のメキシコオリンピックで銅メダルを獲得するまでに国際的競技力(技術・戦術)が向上したことを明らかにしている。ところが、D. クラマーがコーチとして日本において行った活動(指導の実際)についての詳細な言及はここから確認することはできない。本稿でD. クラマーのコーチング理論が今日の日本のサッカー界の競技力向上に果たした役割について、彼の日本での技術指導(その理念と実際)を詳細に検証・分析しようとする意図はここにある。

したがって、D. クラマーが日本で展開したサッカーの技術指導の実際について、彼から直接間接指導を受けた選手、スタッフらによって著された『サッカーに賭けた青春』『サッカーと対峙した男八重樫茂生』等を基本史料として検討・分析を加えていくこととする。本来であればこれら文献史料に加えて、当事者への直接の聞き取り調査(インタビュー)が可能であるので、オーラルヒストリー法を用いて検証していく必要があるところだが、ここではそれを欠いていること(限界)をあらかじめ指摘しておかなければならない。

表1 戦後の国際試合における日本代表チームの戦績*

アジアカップ			
年(西暦)	開催地	日本代表成績	備考
1956	香港	不参加	
1960	韓国	不参加	
1964	イスラエル	不参加	
1968	イラン	不参加	
1972	タイ	不参加	
1976	イラン	予選敗退	
1980	クウェート	不参加	
1984	シンガポール	不参加	
1988	カタール	本大会出場、予選リーグ敗退	
1992	日本	優勝	日本代表初の外国人監督ハンス・オフト就任
1996	UAE	ベスト8	
2000	レバノン	優勝	
2004	中国	優勝	
2007	インドネシア、タイ、マレーシア、ベトナム	4位	
オリンピック			
年(西暦)	開催地	日本代表成績	備考
1948	ロンドン	不参加	戦犯国としてスポーツ界から追放
1952	ヘルシンキ		
1956	メルボルン	本大会出場、1回戦敗退	
1960	ローマ	アジア予選敗退	
1964	東京	本大会出場、1回戦敗退ベスト8	
1968	メキシコ	本大会出場、3位	
1972	ミュンヘン	アジア予選敗退	
1976	モントリオール	アジア予選敗退	
1980	モスクワ	アジア予選敗退	
1984	ロサンゼルス	アジア予選敗退	
1988	ソウル	アジア予選敗退	
1992	バルセロナ	アジア予選敗退	
1996	アトランタ	本大会出場(予選リーグ敗退2勝1敗)	日本代表選手のすべてがJリーグのチームに所属
2000	シドニー	本大会出場(ベスト8)	
2004	アテネ	本大会出場(予選リーグ敗退1勝1敗1分)	
ワールドカップ			
年(西暦)	開催地	日本代表成績	備考
1950	ブラジル	不参加	戦犯国としてスポーツ界から追放
1954	スイス	アジア予選敗退	
1958	スウェーデン	不参加	
1962	チリ	アジア予選敗退	
1966	イングランド	不参加	
1970	メキシコ	アジア予選敗退	
1974	西ドイツ	アジア予選敗退	
1978	アルゼンチン	アジア予選敗退	
1982	スペイン	アジア予選敗退	
1986	メキシコ	アジア予選敗退	
1990	イタリア	アジア予選敗退	
1994	アメリカ	アジア予選敗退	ドーハの悲劇
1998	フランス	本大会出場(予選リーグ敗退3敗)	イランとのプレーオフの末初出場
2002	日本・韓国	本大会出場(ベスト16)	
2006	ドイツ	本大会出場(予選リーグ敗退2敗1分)	

※後藤健生著『日本サッカー史 日本代表の90年 資料編1917-2006』、双葉社、2007年、pp.310-313より作成。

2. D. クラマー招聘以前の戦後日本のサッカー界 (1945～1959)

1) 国内における戦後復興

いうまでもなく、第二次世界大戦による影響は日本の国土や社会生活に甚大な被害を与えただけでなく、スポーツ界にも大きく波及した。進駐軍によって神宮外苑野球場、競技場が接収されたことに始まり、国民の自由意志によるスポーツ活動は一切禁止されたのである。サッカーも戦前のような全国規模の大会を開催するには困難を極める状態であったといわねばなるまい¹²⁾。

日本蹴球協会は当初、各都道府県協会を設立させて運営することを試みたが、困難であるとの判断から関東協会、関西協会を設置して双方の協議による事業の推進を図った¹³⁾。

日本蹴球協会が戦後まもなく手掛けた事業の一つに東西対抗戦がある。1946年2月11日に兵庫県西宮

球技場にて行われた全関東対全関西、関東学生対関西学生の2試合がそれである¹⁴⁾。(この対抗戦に参加したチームは関東と関西の一般と学生の各選抜チームであった。)全国規模の大会が再開される契機となったのは、同年11月に京都市を中心に開催された第1回国民体育大会からであり、戦前からサッカーの全国的な普及を目的としていた日本蹴球協会にとって、開催地が都道府県ごとに持ち回りとなる国民体育大会の開催は大きな意味を有していたといえよう¹⁵⁾。これに併せて、全日本選手権、各大学リーグ戦、全国中等学校選手権などの大会も再開されるようになり、戦後の日本のサッカー界はようやく復興の兆しをみせ始めたのであった。

2) 国際舞台への復帰

第二次世界大戦により、日本は戦犯国として国際オリンピック委員会(IOC)をはじめとする各種国際スポーツ団体(連盟)から追放されていたために戦後ま

表2 日本代表の強化合宿、強化試合（練習試合）*

年月日	開催場所	概要	成績(○勝、△分、×負)	目的とする国際大会等
1948年8月	日大三島予科寮	合宿		国際サッカー連盟復帰に向けて
1949年(夏)	信州浅間温泉	合宿		国際サッカー連盟復帰に向けて
1950年(夏)	信州浅間温泉	合宿		国際サッカー連盟復帰に向けて
1951年2月11日	大阪球場	練習試合	○ 5-4全関西	第1回アジア大会
1951年2月18日	西宮球場	練習試合	○ 9-0全関西	第1回アジア大会
1951年3月1日	ニューデリー(インド)	練習試合(海外遠征)	○ 5-0政府印刷局クラブ(インド)	第1回アジア大会
1951年3月3日	ニューデリー(インド)	練習試合(海外遠征)	○ 2-0インド空軍	第1回アジア大会
1951年3月(日付不明)	ニューデリー(インド)	練習試合(海外遠征)	○ 3-1インド実業団	第1回アジア大会
1951年3月(日付不明)	バンコク(タイ)	練習試合(海外遠征)	○ 5-1アサンブション大学	第2回アジア大会、W杯スイス大会
1951年11月25日	西宮球場	練習試合	× 0-3ヘルシングボリ(スウェーデン)	第2回アジア大会、W杯スイス大会
1951年12月2日	神宮競技場	練習試合	× 0-5ヘルシングボリ(スウェーデン)	第2回アジア大会、W杯スイス大会
1952年6月8日	神宮競技場	練習試合	○ 4-3全香港華人選抜	第2回アジア大会、W杯スイス大会
1952年6月14日	神宮競技場	練習試合	× 0-9オッフエンバハ・キッカーズ(西ドイツ)	第2回アジア大会、W杯スイス大会
1953年11月22日	難波球場	練習試合	× 1-5ユールゴルデン(スウェーデン)	第2回アジア大会、W杯スイス大会
1953年11月29日	神宮競技場	練習試合	× 1-9ユールゴルデン(スウェーデン)	第2回アジア大会、W杯スイス大会
1955年1月2日	アウンサスタジアム(ビルマ)	練習試合(海外遠征)	△ 1-1保険大臣チーム(ビルマ)	第16回オリンピックメルボルン大会
1955年1月5日	アウンサスタジアム(ビルマ)	練習試合(海外遠征)	× 0-3体協会長チーム(ビルマ)	第16回オリンピックメルボルン大会
1955年1月8日	アウンサスタジアム(ビルマ)	練習試合(海外遠征)	△ 1-1アマチュア協会選抜(ビルマ)	第16回オリンピックメルボルン大会
1955年1月11日	アウンサスタジアム(ビルマ)	練習試合(海外遠征)	○ 1-0ビルマ(体協選抜)	第16回オリンピックメルボルン大会
1955年1月13日	アウンサスタジアム(ビルマ)	練習試合(海外遠征)	○ 3-2北ビルマ	第16回オリンピックメルボルン大会
1955年1月18日	バンコク(タイ)	練習試合(海外遠征)	○ 3-1在タイ全華人	第16回オリンピックメルボルン大会
1955年1月19日	バンコク(タイ)	練習試合(海外遠征)	○ 5-1全バンコク	第16回オリンピックメルボルン大会
1955年10月9日	後樂園	練習試合	△ 0-0ビルマ	第16回オリンピックメルボルン大会
1955年7月23日	京都西京極競技場	合宿	京都西京極競技場	第16回オリンピックメルボルン大会
1956年3月18日	京都西京極競技場	合宿	京都西京極競技場	第16回オリンピックメルボルン大会
1956年5月6日	埼玉県大宮市埼玉県立競技場	合宿	埼玉県大宮市埼玉県立競技場	第16回オリンピックメルボルン大会
1956年5月21日	外苑競技場、後樂園競輪場	合宿	外苑競技場、後樂園競輪場	第16回オリンピックメルボルン大会
1957年10月23日	先農壇体育場(中国)	練習試合(海外遠征)	× 1-2北京市(中国)	第3回アジア大会
1957年10月27日	人民体育場(中国)	練習試合(海外遠征)	× 2-3瀋陽(中国)	第3回アジア大会
1957年10月29日	人民体育場(中国)	練習試合(海外遠征)	× 2-3全国第一機体会協隊(中国)	第3回アジア大会
1957年11月3日	江湾体育場(中国)	練習試合(海外遠征)	△ 1-1上海市(中国)	第3回アジア大会
1957年11月5日	江湾体育場(中国)	練習試合(海外遠征)	○ 2-1紅旗体協隊(中国)	第3回アジア大会
1957年11月10日	越州山体育場(中国)	練習試合(海外遠征)	○ 3-2光州市(中国)	第3回アジア大会
1958年12月25日	政府大球場(香港)	練習試合(海外遠征)	× 2-5香港	第17回オリンピックローマ大会
1958年12月27日	クアラルンプール(マラヤ)	練習試合(海外遠征)	× 0-2マラヤ	第17回オリンピックローマ大会
1958年12月28日	ムルデカスタジアム(マラヤ)	練習試合(海外遠征)	× 2-6マラヤ	第17回オリンピックローマ大会
1958年12月31日	華人会館(マラヤ)	練習試合(海外遠征)	○ 3-0ペラ州(マラヤ)	第17回オリンピックローマ大会
1959年1月3日	ベナン(マラヤ)	練習試合(海外遠征)	△ 2-2ベナン州(マラヤ)	第17回オリンピックローマ大会
1959年1月4日	シティースタジアム(マラヤ)	練習試合(海外遠征)	○ 3-1マラヤ	第17回オリンピックローマ大会
1959年1月7日	ムルデカスタジアム(マラヤ)	練習試合(海外遠征)	× 1-2マラヤンマラヤ	第17回オリンピックローマ大会
1959年1月8日	ムルデカスタジアム(マラヤ)	練習試合(海外遠征)	△ 2-2スランゴール州(マラヤ)	第17回オリンピックローマ大会
1959年1月10日	ジャランブサルスタジアム(シンガポール)	練習試合(海外遠征)	○ 4-3シンガポール	第17回オリンピックローマ大会
1959年1月11日	ジャランブサルスタジアム(シンガポール)	練習試合(海外遠征)	× 2-3シンガポール	第17回オリンピックローマ大会
1959年1月14日	政府大球場(香港)	練習試合(海外遠征)	△ 1-1香港選抜	第17回オリンピックローマ大会
1959年8月8日	小石川サッカー場	練習試合(海外遠征)	○ 2-1在朝鮮選抜	第17回オリンピックローマ大会
1959年8月31日	ムルデカスタジアム(マラヤ)	親善大会(海外遠征)	△ 1-1香港	第17回オリンピックローマ大会
1959年9月2日	ムルデカスタジアム(マラヤ)	親善大会(海外遠征)	× 2-4香港	第17回オリンピックローマ大会
1959年9月3日	ムルデカスタジアム(マラヤ)	親善大会(海外遠征)	○ 4-1シンガポール	第17回オリンピックローマ大会
1959年9月5日	ムルデカスタジアム(マラヤ)	親善大会(海外遠征)	△ 1-1韓国	第17回オリンピックローマ大会
1959年9月6日	ムルデカスタジアム(マラヤ)	親善大会(海外遠征)	× 1-3韓国	第17回オリンピックローマ大会
1959年9月9日	華人会館(マラヤ)	練習試合(海外遠征)	△ 2-2ペラ州(マラヤ)	第17回オリンピックローマ大会
1959年9月13日	サイゴン(ベトナム)	練習試合(海外遠征)	× 1-3南ベトナム選抜	第17回オリンピックローマ大会
1959年9月15日	サイゴン(ベトナム)	練習試合(海外遠征)	× 1-2南ベトナム選抜	第17回オリンピックローマ大会

*「全日本合宿練習」(日本蹴球協会編『日本サッカーのあゆみ』、日本蹴球協会、1974年、pp.148-149)

「アジア大会までの日本代表の強化」(日本蹴球協会編『日本サッカーのあゆみ』、日本蹴球協会、1974年、p.163)

「日本代表強化合宿」(田畑正治編『第3回アジア競技大会報告書』、財団法人日本体育協会、1959年、p.38)

「日本のサッカー史」(日本サッカー協会、日本サッカーライタース編『最新サッカー大事典』所収、大修館書店、2002年、p.263)より作成。

後藤健生著『日本サッカー史 日本代表の90年資料編1917-2006』、双葉社、2007年、pp.22-39

もなく開催された第14回オリンピックロンドン大会(1948年)やサッカーW杯ブラジル大会(1950年)等の国際大会への参加は認められていなかった。

国際舞台への復帰を目指し日本のサッカー界はまず、代表チームの強化を目的に合宿を敢行した。第二次世界大戦前の第13回オリンピックベルリン大会(1936年)直後から日本蹴球協会技術委員長(竹腰重丸)のもとに、年度ごとに日本代表選手候補が選出され、常時強化策が講じられていたわけだが、こうした流れを継承する形で国際試合常備軍と言われる、いわゆる日本代表チームが編成され強化合宿が実施されたのである¹⁶⁾。この強化合宿は、毎年1回夏に招集され、選手の技術習得の実態を判断する一つの目安となった。こうして、1950年9月23日に日本蹴球協会は国際サッカー連盟(FIFA)に復帰することが正式に認め

られたのであった。

翌1951年3月にインド(ニューデリー)において開催された第1回アジア競技大会出場はまさに、戦後のサッカー日本代表チームの国際舞台復帰への第一歩となったのである。それまでの強化合宿が実を結び、この大会では出場6カ国中3位という好成績を残した。加えて、1953年に西ドイツ(ドルトムント)で開催された第3回国際学生週間(現ユニバーシアード)に出場した日本学生選抜チームは、当時の強豪国西ドイツチームに3-4と善戦しさらには1956年第16回オリンピックメルボルン大会出場を成し遂げ日本サッカー界の国際的競技力が具体的に示されるようになったのである。

しかしながら、国際舞台への復帰後もないこの3大会を除けば、国際的大会においてサッカー日本代表

チームが活躍する様子を確認することはできないのである。このことは、表1の戦後の国際試合における日本代表チームの戦績からも明かである。また表2のようにW杯アジア地区予選、オリンピック予選、アジア競技大会に向け、国内での強化合宿および海外遠征などを重ねるものの、その成果は思うように上がらず、迫りくる1964年の東京オリンピックに向けて、日本蹴球協会は従前の強化策とは異なる全く新しい方策を講じるのであった。

3. D. クラマーの招聘とそのコーチングの実際 (1960～1967)

1) 外国人指導者 D. クラマーの招聘

1959年5月26日に西ドイツ、ミュンヘンで開催された第55回IOC総会にて、第18回大会(1964年)の開催地が東京に決定すると、日本オリンピック委員会内には東京オリンピック強化対策本部が設置され、各競技(スポーツ)の東京オリンピックに向けた国際交流等を含む5カ年計画が打ち出され競技力強化(向上)のための方策が推進された。表3は「東京オリンピック選手5カ年計画」である。

この中では、①選手の強化について5カ年間の一貫した総合的計画的強化方策を立て関係競技団体の強化策(コーチの指導力の高揚拡充、コーチや選手団の国際交流、合宿、研究会など)に物心両面から援助を行う、②競技団体が強化策を進めるにあたって直面するいろいろな隘路を開く¹⁷⁾、という二つの目標が示

され、具体的な活動が展開された。強化を目的とした国際交流とは具体的に、①選手が直接的に強化を目的とした海外遠征を行ったり、国際大会に出場することであり、②外国人の指導者を招聘して日本代表選手の強化と日本人指導者の指導・育成に携わってもらうこと、を言ったものである。

1960年、日本蹴球協会はこの東京オリンピック強化対策本部の指針に従い、外国人指導者の招聘を本格的に検討し始めた。長期間外国人指導者を招聘するにあたり当時日本蹴球協会会長であった野津護は、日本人選手を育成する外国人指導者に次の2点を求めることとした。すなわち、①日本人の性格を理解し、選手と心の交流ができる人物、②技術的、体力的にもコーチとして優秀な人物であること、である¹⁸⁾。日本蹴球協会は当時ケルン体育大学に留学していた成田十次郎を介し、西ドイツ蹴球協会に日本代表チームへのコーチ要請を打診、同協会は西部地区主任コーチであったD. クラマーを日本蹴球協会に推薦したのである。日本代表チームはヨーロッパ強化遠征にあわせて、彼が主任コーチを務めるデュイスブルグのシュボルト・シュレーに滞在し、直接指導を受けることを試みた。この時の指導を通して彼が日本蹴球協会の求める外国人指導者の条件に合致する人物であるとして西ドイツ蹴球協会の協力の下にコーチとして招聘することを決定したのであった。

2) D. クラマーのコーチング理論(指導理念とその実際)

①基礎技術の習得とその練習方法

言うまでもなくサッカーに限らず従前の日本における競技スポーツの指導方法は、科学的な裏づけからではなく、とにかく「頑張ること」に主眼を置いていた。いわゆる「精神主義的練習」であり、すべてが根性のあるなしで片付けられているという状況であった。東京オリンピックをむかえようとする当時においても動物園のライオンの檻の前でライオンと向かい合ったり、就寝中もずっと電灯を消さずに寝るといったトレーニング方法が行われていたのである¹⁹⁾。競技力向上を求めつつも、スポーツと金銭が結びつくことを認めようとしなかった当時の日本のスポーツ界(アマチュアリズム全盛期)においては、今日のJリーグの強豪チームのように莫大な資金力を背景にした指導者の招聘、選手の育成を手掛けることは考えにも及ばなかった事柄であったに違いない。

D. クラマーを招聘する以前の日本のサッカー指導者は、その多くが大学在学時に日本代表選手として活躍した学生や体育系教員養成大学などで選手として活躍していた学生であった。大学卒業後に教員となり、自身の経験にのみ基づいて中学・高等学校等の運動部

表3 東京オリンピック選手5カ年計画概要*

年度	強化期	主な目的
1960	第1次基礎準備期	①本部組織機構の確立 ②コーチ制度の設置 ③トレーニングドクターの配置 ④スポーツ科学研究の基礎固め ⑤一般的強化と新人の発掘
1961	第2次基礎準備期	①トレーニング思想の確立 ②からだづくりの展開 ③国際交流の実施 ④立地条件の整備
1962	第1次本格的強化活動期	①からだづくりの積極的実施 ②海外事情の調査 ③精神教育の実施 ④トレーニング用器具、用具の整備
1963	第2次本格的強化活動期	①体力と技術の融合 ②重点的英才教育の実施 ③東京国際スポーツ大会での実力評価 ④トレーニング・センターの確保 ⑤健康管理の実施
1964	仕上げ期	①臨戦体制の確立とオリンピック代表選手団結成準備 ②仕上げ期トレーニングの実施 ③健康管理の実施

* 「東京オリンピック選手5カ年計画」(財団法人日本体育協会編:『東京オリンピック選手強化対策本部報告書』所収、財団法人日本体育協会、1965年、p.49)より作成。

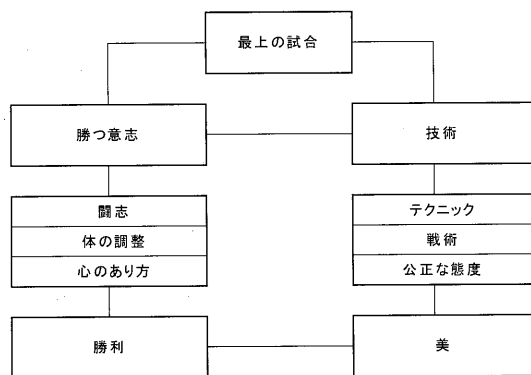


図1 D. クラマーが考えるサッカーの最も良い試合※

※第1回クラマー講座 勝つ意志そして優れた技術を(D. クラマー・昌谷春海 訳、日本蹴球協会編「サッカー」第7号、日本蹴球協会、1961年9月、p.6)より転載。

活動を指導、展開しているというのが当時の日本のサッカー指導者の実態であったと言えよう²⁰⁾。

ところが、D. クラマーの指導の特徴は、すべての練習が漠然と行われるというのではなく、なぜこの練習を行うのかという理由(根拠)が明確に選手に示されていた。コーチの主観(経験論)のみで練習が展開されるのではなく、誰にでも理解しやすい客観的(理論的)な指導法であったのである。彼によってこれまで日本では行われてこなかったような新たな技術指導が紹介されたわけだが、従前の日本流の精神論的指導などもうまく取り入れ、日本人選手に合わせた独自の練習メニュー(指導法)が確立されていったのである。

図1はD. クラマーが示した「サッカーの最も良い試合を行うために必要なポイント」を表したものである。

これによれば、D. クラマーがいうサッカーにおける最も良い試合を達成するための要件には大きく、①「勝つ意志(精神的な面)」と②「技術」とが挙げられよう。これとD. クラマー招聘以前の日本における指導法を比較検討してみると、それ以前の指導法では、その力点が勝つ意志に通ずる「闘志」「心のあり方」に偏重していたことが理解される。D. クラマーは日本の精神的な部分の強さを継承しつつも技術面におけるテクニックや戦術の指導を積極的に推進していったのである²¹⁾。

D. クラマーが、当時の日本人選手のプレーを見て次のように分析している²²⁾。

私は日本の選手諸君やいろいろのチームを見た経験から、次のことがいえると思います。すなわち、大部分の選手はボール扱いが非常に未熟であること、ボールから自由でないこと(ボールを持っても、持たなくても、同じようにプレーする

表4 D. クラマー系統的な基礎練習※

練習の名称	内容
基礎練習	立ったままで簡単な条件のもとに、くり返し正確に、身体の動きのプロセスを練習する。
応用練習	すべてゲーム中のように動きながら、走りながらの、練習をしなければならない。
実践的な練習	相手を配置して、ボールを保持している選手に対して攻撃を加え打ち負かそうとし、ボールコントロールを困難にする条件を課す。

※第2回クラマー講座 試合における二つの使命(D.クラマー・昌谷春海 訳、日本蹴球協会編「サッカー」第15号、日本蹴球協会、1962年1月、p.23)より作成。

ことができない)、したがってあらかじめ周囲を見ることができず、試合全体への見通しを持っていない、と。

このことから彼は、ボールを正確にコントロールすることによって、次のプレーにスムーズに移行できることを教えてくれている。D. クラマーが日本代表チームに対して重点的に指導したテクニックとは、ボールを使用したプレー、特にボールを自分の意図したところに止め(トラップ)、狙ったところに正確にボールを蹴れる(パス、シュート)といった基礎技術である。彼は基礎練習(トラップ、パス、シュート)を系統的に行い、目的を正しく認識させ、自らが示範することの重要性を日本代表選手や指導者に対して説いていったのであった。

またD. クラマーによれば、スムーズなボールコントロールを達成するためには基礎練習から応用練習、そして実践的な練習へと段階を踏んだ系統的な指導法が必要である、という。当時の代表選手に対して彼は、表4に示した基礎技術習得のための系統的指導法を展開していったのである。

加えて彼は、トラップやパス、シュートといった基礎技術を習得するにあたって、最初は相手競技者からのプレッシャーを全く受けず、さらにポジションを移動することなくその場で行う練習を推奨した。基礎練習の第一段階でこうした方法が取り入れられているということは、この練習が最も難易度の低いもので正確なキックやトラップのフォームを反復することにより選手に完全に体得させようとするD. クラマーのねらいがうかがえる。表5～7はサッカーの基本的技術である、インサイドキック、インステップキック、ヘディングのD. クラマー招聘以前の日本における指導法とD. クラマーの指導法を比較したものである。

これらの表から、D. クラマーの招聘以前と以後のキックの蹴り方の指導内容を分析すると、インサイドキック、インステップキック共にボールを蹴る蹴り足についてD. クラマーは従前の指導内容には見られない言及をしている。D. クラマーはボールを蹴る際に

表5 インサイドキックの蹴り方と指導内容※

年(西暦)	指導内容
1928年(戦前)	①ボールを地面に置く。 ②3メートル程後方から助走をつける。 ③左足(軸足)をボールの左側15cmほど離れたところに置く。 ④爪立ち、右足を後方より振る。 ⑤右足の親指をボールの15cmほどの所に軽く置くと同時にその母指を中心として内側へ強く円を書き、足の内側の後方足の下部でボールを弾く。
1959年 (D. クラマー招聘以前)	①ボールを地面に置く。 ②3歩程後方から助走をつける。 ③右足のくぼみの部分(土踏まず)が、ボールの中心に、直角にあたるようにする。 ④右足のかかとを前に押し出すようにし、ボールを前に押し出す。
1962年 (D. クラマー招聘以後)	①くるぶし(足首)を固定し、つま先は下に下げないようにする。 ②足首の最も広い部分がボールに当たるようにする。 ③立ち足はボールの進行方向に向け、ボールのそばに置き、バネのようにして全身を支える。 ④蹴り足はボールを追うようにして多少前まで振る。

※「キック」(野津謙、鈴木重義著『ア式蹴球』、アルス、1928年、p.72)

「インサイドキック」(多和田雄著『図解サッカー』、不味堂出版、1959年、pp.32-35)

「インサイドキック」(日本蹴球協会編「サッカー」、日本蹴球協会、1962年、pp.27-28)より作成。

表6 インステップの蹴り方とその指導内容※

年(西暦)	指導内容
1932年(戦前)	①ボールを地面に置く。 ②3メートル程後方から助走をつける。 ③左足をボールの左側15cmの所に、左足の親指先とボールとが並ぶ様にし、爪立ちして、強く踏み切る ④左の膝を120度程前方に屈し、右足に、できるだけ力を入れ、爪先を、出来るだけ、下に向け、関節を固くして前方に強いキックを行う。
1959年 (D. クラマー招聘以前)	①ボールを地面に置く。 ②右足の甲がボールの膨らみに当たるように立ち足である左足を適当に移動させる。 ③右足の甲がボールに対してまっすぐに、たてに垂直に当たっているか確認する ④ボールを蹴る瞬間に蹴り足である右足の膝はボールの上にかぶさるようにして振る
1962年 (D. クラマー招聘以後)	①足先を十分に伸ばし、くるぶし(足首)を固定する ②立ち足を蹴らうと思う方向に向ける ③蹴り足はいくぶんボールを追って振る

※「キック」(野津謙、鈴木重義著『ア式蹴球』、アルス、1928年、p.72)

「インステップキック」(多和田雄著『図解サッカー』、不味堂出版、1959年、pp.28-32)

「インステップキック」(日本蹴球協会編「サッカー」、日本蹴球協会、1962年、p.27)より作成。

「足首を固定して蹴るように」と指導している。この足首を固定するという表現は、ボールを蹴る際に蹴り足の足首に力を入れ、照準がぶれることのないようにしてキックの精度を上げることを目的としている。

ヘディングの指導においては、D. クラマー招聘以前から変化していない指導内容としてボールをよくみて額でボールを打つということがわかる。戦前のヘディングの特徴として、ヘディングをする際には常にジャンプして首を振れということがわかる。戦後D. クラマー招聘以前では、上体のスイングを使ってボールを飛ばすように指導していることがわかる。D. クラマー招聘以後の指導内容では顎を引いて首を固定す

表7 ヘディングの方法と指導内容※

年(西暦)	指導内容
1932年(戦前)	①ボールをよくみる。 ②出来るだけ首を延ばしてボールに自ら頭をボールに当てに行く。 ③ヘディングをする際には常にジャンプして顎の筋肉を使い、頭を振るようにする。
1959年 (D. クラマー招聘以前)	①絶対に目をとじないこと。 ②ボールは額でうつこと。頭でっぺんではない。 ③上体のスイングを使うこと。
1962年 (D. クラマー招聘以後)	①ボールが目の高さの所で捉える。 ②顎をひいて、首を固定して、額でうつ。 ③首を引くように身体を張り、全身を使い前方にはじき出す。

※「ヘディング」(野津謙、鈴木重義著『ア式蹴球』、アルス、1928年、p.123-125)

「ボールを頭ではじく」(多和田雄著『図解サッカー』、不味堂出版、1959年、pp.51-52)

「ヘディング」(日本蹴球協会編「サッカー」、日本蹴球協会、1962年、p.28)より作成。

ることが付け加えられ、さらに全身をしならせてその反動でヘディングをするように指導していることがわかる。D. クラマー招聘以前は上半身のみの反動でヘディングしていたが、D. クラマー招聘後は身体全体を使ってヘディングすることにより日本人が苦手としていたヘディングの強化につながっていったことが考えられる。

このような指導法を用いて第一段階を達成してくると第二段階で応用練習として試合を想定した動きながらの基礎練習を行い、第三段階では、相手競技者を配置して身体的接触等のプレッシャーを受けながらの基礎練習を行うというものである。このように彼が実践した系統的練習とは、難易度を少しずつ上げながら展開していく技術指導であったことが確認できよう。

②戦術の指示とその練習方法

D. クラマーは、サッカーにおける「技術」の要素としてトラップ、パスやシュートなどのボールコントロール(D. クラマーは図1においてこれらのプレーをテクニクと呼んでいる)に加え、戦術(タクティク)を挙げている。

こうした球技の戦術についてはギュンター・シュティラー(ドイツ: Günther Stiehler)が「球技戦術論」の中で次のように述べている²³⁾。

球技の戦術は球技における競争の指揮の形態、可能性、手段ならびに仕方に関する理論である。球技における戦術の実際とは、合目的的なあるいはその時々ゲームの状況において可能かつ必要なプレーヤーの個人的行動と集団的行動の総体であり、その行動は敵との対決において、また合法的なゲームのルール、ゲーム・システム、並びに倫理的属性、体力および技能の範囲内において、最も可能な成果を目指して実施されるものである。

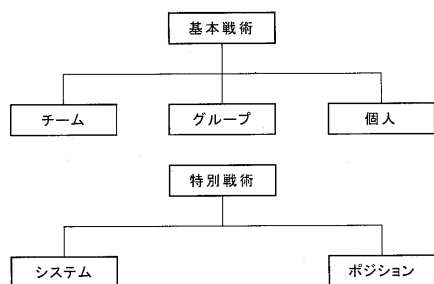


図2 D. クラマーが考えるサッカーの戦術*

※サッカーの戦術研究 クラマー・コーチが語る
サッカーの戦術 (齋田三男, ベースボール・マガジン社編「サッカー」第2巻第8号, 1967年8月, p. 49) より作成。

このように球技の戦術とは、個人の能力や試合の状況に応じて目的に見合った選手を配置し、最も可能な成果を目指すために行うものである。チームスポーツにおいて、全く同レベルの競技能力を有する選手陣からなるチーム同士によってミスのない理想的な試合が展開される場合、番狂わせ的な偶然性の入り込む余地はほとんどなく、このような場合に勝敗を決する大きな要因に戦術の優劣が挙げられる。

D. クラマーによるサッカーの指導の場合にも、戦術はテクニックとともにその技術を構成する重要な要素であることが理解される。彼は、日本代表チームを指導する中でボールを扱うテクニックの習得とあわせて正しい戦術の理解についても積極的に指導していった。D. クラマーのいうサッカーの戦術とは、大別すると「基本戦術」と「特別戦術」とに分けることが可能である。図2はその「基本戦術」「特別戦術」についてその詳細を示したものである。

図2によれば、「基本戦術」は、①「個人戦術」、②「グループ戦術」、③「チーム戦術」に分類できる。一方、「特別戦術」は、①「ポジション (各ポジション) の戦術」、②「システム (4-4-2 等の選手の配置) の戦術」とに大別される。D. クラマーはこれらの類型化は、サッカーの戦術を理解するうえで便宜的に分類しているものであって、実際の試合において、ここまですべてが個人の戦術で、それ以上はグループの戦術であるとか、ここまですべてがポジションの戦術であって、それ以上はシステムについての戦術である、というような細かくかつ精確に分別できるものではないこともあわせて強調している。個人戦術があって初めて成立しうるグループ戦術であり、さらにはチーム戦術へとつながっていくものである。ポジショナルプレーを総合したものがシステムとしてのプレーであり、互いに密接な関係があるということを主張し、彼は、戦術の基礎を個人戦術に置き、1対1の状況下での個人戦術の練習から始まり、次に2対1、2対2といった具合に人数を増やしながら、グループ戦術、チーム戦術へと練習を

系統的に発展させていった。一方、特別戦術をポジション戦術とシステム戦術に分け、試合ごとに選手の起用を変えたりなどを試みてもいた。これは選手に変化するポジションシステムを確認させることを目的で試行されたものであったと言えよう。

4. D. クラマーの技術指導 (コーチング理論) がその後の競技力向上に及ぼした影響 (1968~1970)

1) 「五つの提言」とメキシコオリンピックにおける活躍

①五つの提言

D. クラマーの招聘により、東京オリンピック (1964年) ではベスト8進出という活躍ぶりをみせたサッカー日本代表チームだが、D. クラマーはコーチ退任 (離日) にあたり、日本のサッカー界に対して、①「国際交流の充実」、②「指導者の育成」、③「リーグ戦の導入」、④「コーチ組織の結成」、⑤「天然芝グラウンドの普及」、といういわゆる「五つの提言」を残していった²⁴⁾。この「五つの提言」は、東京オリンピックを機にサッカー日本代表チームの競技力が国際大会において上位に進出するまでに向上し、さらなる飛躍のために今後必要とされる具体的方策をまとめたものであった。

「国際交流の充実」とは、国際大会への参加や、日本国内での外国チームとの強化試合、海外遠征等を行うことにより、常に国際試合の経験を積んでいくことを目的としたものである。日本代表チームは、銅メダルを獲得したメキシコ大会までのおよそ4年間に外国の代表チームやその他のクラブチームと81試合を行い、そのうち50試合をいわゆるアウェー (海外、敵地) で行っている²⁵⁾。オリンピックやW杯のたびに新たな戦術が創り出され、日々変化する世界のサッカー情勢を実際に体験することを主眼とし、海外遠征を当時の日本代表チームの必須条件としたのであった。

次に掲げられている「指導者の育成」は、指導者の経験 (主観的経験論) にのみ基づいた指導を行うのではなく、客観的理論に拠る指導が展開できるコーチの養成を目指すというものである。

東京オリンピックの強化策として外国人であるD. クラマーが招聘されたことからわかるように、日本代表チームをサッカー強豪国と互り合えるまでにレベルアップさせることが可能な指導者は当時日本国内には存在しなかった。D. クラマー就任後まもなく、日本代表の監督、コーチにそれぞれ長沼 健と岡野俊一郎が抜擢され²⁶⁾、二人はD. クラマーの下で指導者としての経験を積み、オリンピックをはじめとする国際試合で日本代表チームを率いた。D. クラマーと日本蹴球協会は長沼、岡野をそれぞれ西ドイツ (当時) ・デュ

イスブルグのシュポルト・シューレで行われた西ドイツサッカー協会主催の指導者講習会に参加させた。これは当時の日本には日本蹴球協会のもとに指導者を養成する組織（システム）がまだ構築されていなかったことによるものである。そこでD. クラマーの下、指導者として十分な理論を学習した長沼や岡野らが、日本国内では指導者の養成にもあたったのである。

D. クラマー招聘以前の日本のサッカー界では、全国実業団選手権や全日本選手権（天皇杯）等の全国大会が日本の最高峰のサッカー大会として位置づけられていた。いずれの大会も出場選手のほとんどが社会人であり、長期間仕事を休んで大会に参加することはほとんど不可能であった。そのため、開催地を1カ所にし、短期間のトーナメント方式を採用していた。1チームあたりの年間試合数は非常に少なく、特に地方の有力チームは年間を通して数試合しか上位の強豪チームと試合をすることができないという状況が続いていたのである²⁷⁾。D. クラマーは単に日本一のチームを決定するだけでなく、日本のサッカー界全体の競技力向上につながるような全国規模のトップチームを対象にした「リーグ戦の導入」を推奨したのである。

一方、「コーチ組織の結成」も、日本国内において一貫したサッカーの指導を展開していくためには急いで取り組まなければならない事柄であった。日本代表監督、日本代表コーチを中心とした全国規模のコーチ組織の結成を言い、その活動内容は、日本代表監督が国際試合の結果から日本代表選手（チーム）の問題点を分析、それをコーチ組織を通じて日本中の指導者に共通認識として理解してもらえるようなシステムを構築していくことであった。実際の指導現場では、選手の年齢ごとにカテゴリーが編成され、それぞれに習得すべき技術や目標が設定、指導が実践されている。コーチ組織を通じて各指導者が当該期に必要な対策を練り、日本代表チームが抱える問題点を解決、日本の国際競技力を向上させようという意図がここにはあった²⁷⁾。

さらには、東京オリンピックを開催するにあたって、東京国立霞ヶ丘競技場、駒沢オリンピック公園陸上競技場、埼玉県立大宮公園サッカー場等、サッカーの国際試合の開催を可能にする天然芝のグラウンドが建設された。しかし当時、多くの場合は学校の校庭を中心とする土のグラウンドでの試合であった。

球体であるサッカーボールを凹凸の激しい土のグラウンドで使用するとそのコントロールには困難を極める。正確なキックやトラップから生まれるサッカーのスペクタルな部分を披露するためには天然芝のグラウンドは必須であり選手への安全面からも「天然芝グラウンドの普及」は日本のサッカーの競技力向上には欠くこ

表8 東京オリンピック、メキシコオリンピック予選の先発選手*

大会名	日本代表選手名
東京オリンピック (アルゼンチン戦)	横山謙三、片山洋、山口芳忠、八重樫茂生、磯田光夫、鈴木良三、川淵三郎、釜本邦茂、水城博通、宮本輝紀、杉山隆一
メキシコオリンピック予選 (韓国戦)	横山謙三、片山洋、森孝慈、上久雄、山口芳忠、水城博通、八重樫茂生、宮本輝紀、松本育夫、杉山隆一、釜本邦茂

*「日本代表 全記録」(日本サッカー協会、日本サッカーライターズ編『最新サッカー大事典』所収、大修館書店、2002年、p.81、p.86)より作成。

■部分は東京オリンピック、メキシコオリンピック予選の両方に出場している選手

とのできない要件としてD. クラマーは採り上げたのであった。

②メキシコオリンピック (1968年) における活躍

東京オリンピックの後、日本蹴球協会はD. クラマーが示した五つの提言に従って、日本サッカーリーグを開幕させたり指導者養成等の活動を推進し1968年に開催されるメキシコオリンピックに向けて日本代表チームの強化策を展開していった。

メキシコオリンピックの予選大会には東京オリンピック当時の日本代表メンバーを中心に編成された。表8は東京オリンピックおよびメキシコオリンピック予選大会時の日本代表チームの先発選手である²⁸⁾。

表8から、東京オリンピックの先発選手のうち8人がメキシコオリンピック予選の先発選手として起用されていたことがわかる。このことは、東京オリンピックの強化期間を含めておよそ8年間D. クラマーのもと指導を受け続けた選手達でメキシコオリンピックに臨んだということがいえるだろう。

1968年に入り日本代表は長沼 健監督のもとメキシコオリンピックに向けて日本代表候補選手としてA・Bの二つの日本代表候補チームを編成した。Aチームは日本代表のレギュラー選手を中心に編成され、Bチームは若手を中心とした控え選手で編成された²⁹⁾。この代表候補を2チームに分ける方法は東京オリンピック時の強化策としてD. クラマーのもとで用いた方法と同様な方法であり、D. クラマーの手法をそのまま継承していることがわかる。また強化策としてメキシコオリンピックのサッカーの会場の現地調査を兼ねた強化試合を1968年3月にメキシコ・アステカスタジアムにおいて地元メキシコのオリンピック代表と行った。試合は0-4で敗戦したが試合内容よりも、高地による低酸素と異常乾燥という二つの環境面の問題を知ることができた³⁰⁾。表9はメキシコオリンピックにおいて、日本代表が各対戦国と戦うにあたり試合前に準備した戦術である³²⁾。

表9からメキシコオリンピックにおける日本代表の攻撃と守備における戦術の概要を知ることができ

表9 メキシコオリンピックにおける各対戦国に対する日本の戦術*

対戦国名	戦術
ナイジェリア	ナイジェリアの選手はフリーの状態では個人技に秀でているがマークに着かれるとプレーの精度が低下する。 その為ナイジェリアの攻撃の起点となる、アニエクに小堀、ラウルに片山、アゴゴビに宮本征勝がそれぞれマンマークする。 攻撃においてはナイジェリアのサイドバックが裏のスペースへの対応が弱いため、松本、杉山のスピードをいかし中央の釜本のヘディングシュートで得点を狙う。
ブラジル	ブラジルの攻撃の起点となる中盤の選手に片山がマンマークする。 ブラジルは個人技に優れている為、中盤でボールをキープさせ時間を稼ぐ。 釜本を中盤のポジションに下げ、守備にかけ人数を増やし、相手の4バックの背後のスペースをつく、カウンター狙いの攻撃をしかける。 後半ブラジルの運動量が低下したタイミングを狙って釜本のポジションを本来のセンターフォワードに戻し得点を狙いに行く。
スペイン	引き分け以上で決勝トーナメントに進出できる日本は失点を避けるため、中盤のサイドの選手を自陣深くまで下げた守備的な布陣をとる。
フランス (準々決勝)	フランスの攻撃の起点となるナンカン、ドタンマン、ルアヌーに山口、片山、宮本征勝をマンマークにつかせる。 相手の守備は4バックのラインディフェンスの為ボールを奪ったら素早く相手守備陣の背後のスペースに供給し、釜本、渡辺、杉山の攻撃陣が得点を狙う。
ハンガリー (準決勝)	ハンガリーの攻撃の起点となる、ドナイ、スツチにそれぞれ、山口、小堀がマンツーマンディフェンスで対応する。 先取点を狙いにいき相手のペースを乱し、焦りを誘う。
メキシコ (3位決定戦)	メキシコがボールを奪ったらゴールキーパーを含めた7人の日本選手はディフェンスラインを自陣まで下げて守備に徹する。 中盤では無理にボールを奪いにいかず時間を稼ぐ。 ボールを奪ったら速攻とダイレクトパスで相手を変えさせて得点の機会を狙う。

※日本チームが考え、実行したこと（日本蹴球協会編「サッカー」第88号、日本蹴球協会、1968年12月、pp.32-36）より作成。

る。

守備においては、事前の偵察から、相手チームにおける攻撃の起点となる選手を見つけ出しその選手にマンマークディフェンスを行っている。マンマークに付く選手はディフェンスの山口、片山、宮本征勝が中心であり、試合ごとに各自が担当するマーカーが決定されていた。相手チームにおける攻撃の起点になる選手とは、フォワードに得点につながりうるパスを供給する中盤の選手と、そのパスを受けて得点を狙うフォワードの選手のことである。これらの選手をピックアップし、マンマークディフェンスで対応した。

攻撃における戦術は、左サイドの杉山のドリブル突破からフォワードの釜本に合わせるという得点パターンを多く作り出していた。メキシコオリンピックにおける日本代表の対戦国は過去の実績からもわかるように日本よりも個人の技術が上回っていた。そのため、相手の攻撃力が日本より勝りディフェンスラインを高く配置してきたときは、ボールを奪ったら素早くディフェンスラインの背後のスペースに供給し、釜本が得点を狙うカウンター思考が強い戦術を用いていたことがわかる。

ポジションのシステムとして日本代表はスイーパーシステムを用いた1-4-2-3システムを採用していた。

スイーパーを務めた鎌田はディフェンスラインのカバーリングが主な役目であり、スイーパーシステムを採用していた日本代表は実質5人のディフェンダーを要して守備を固めていた。

相手チームがブラジルやハンガリーのように苦戦が強いられる攻撃に秀でている相手の場合は、フォワードの釜本を中盤まで下げて守備における人数を多くするといった対応がとられていた。逆に相手が疲れて運動量が落ちたり、ディフェンスラインを引いて得点を狙いにくいときには釜本を本来のフォワードのポジションに戻すという戦術が取られていた。

2) メキシコオリンピック以降の日本サッカー協会の取り組み

①国際サッカー連盟コーチングスクールの開催とD. クラマーの招聘

D. クラマーは1964年10月東京オリンピック閉幕後日本を離れることとなるが、アジアの日本におけるサッカーの普及と発展に尽力した功績が国際サッカー連盟によって評価された。国際サッカー連盟はD. クラマーを直属の指導者、すなわちFIFA専任コーチとして、アジア諸国をはじめとする世界各国にサッカーの普及と発展を目的とした巡回指導を彼に委ねたのである。国際サッカー連盟がD. クラマーをFIFA専任コーチとして他のアジア諸国に指導者として巡回させた目的は日本の場合と同様に指導者育成の問題を解決してもらうことにあったことがわかる。

このように東京オリンピック閉幕後、FIFA専任コーチに任命されたD. クラマーは主に当時ヨーロッパや南米に比べ、サッカーの後進地域に位置づけられていたアジア諸国を1カ国およそ1カ月の期間で、巡回指導をしている。一方、アジア諸国におけるサッカーの指導者の実態を見てみると日本のような目覚ましい効果は現れなかったことがわかる³²⁾。そこで1969年7月25日から1969年10月25日にかけて、アジア諸国のサッカー指導者を対象にした第1回FIFAコーチング・スクールが開催された。FIFAコーチング・スクールの講義課程および授業時間割はD. クラマーの手によって立案された。D. クラマーは自らが日本代表に指導したように、模範を示し、理論的に指導し選手が技術習得に至るまで繰り返し反復指導を行えるような実技を多く取り入れた講習会を展開した。

②日本サッカー協会の指導者養成講習会にみるD. クラマーの影響

D. クラマーの指導のもと第1回FIFAコーチング・スクールが開催された翌年、1970年7月25日から8月24日に日本蹴球協会公認指導者養成講習会とサッカー・リーダー認定講習会が日本蹴球協会主催

のもとで開催された。この講習会は各都道府県協会における指導者を養成させることを目的に開催された。日本蹴球協会公認指導者養成コーチング・スクールおよびサッカー・リーダー認定講習会はD. クラマーを主任講師として開催されたFIFA コーチング・スクールをモデルにして開催された。日本蹴球協会公認指導者養成コーチング・スクールの実技指導は平木隆三が担当した。彼がいかにD. クラマーの指導法に影響を受けていたのかについては、日本蹴球協会公認指導者養成コーチング・スクールおよびサッカー・リーダー認定講習会の時間割から知ることができる。日程に関してはFIFA コーチング・スクールに比べ、日本蹴球協会公認指導者養成講習会は1カ月間、サッカー・リーダー認定講習会は1週間と開催期間が短い。しかし、時間割に記載された講義の名称を見る限りでは、D. クラマーの下で開催されたFIFA コーチング・スクールと相違ないカリキュラムが形成されていたといわねばならない³³⁾。

このようにD. クラマーの指導の下で開催されたFIFA コーチング・スクールは、日本サッカーの指導者育成に大きな影響を与えたのである。

5. ま と め

本稿は、D. クラマーが今日の日本サッカーの競技力向上に果たした役割について、彼の日本での活動、技術指導を中心に分析し、戦後の日本におけるサッカーの技術史の一側面を明らかにしようとするものであった。ここで検討した結果を整理すると以下のよう

- 1) 戦後新たなサッカーの全国大会として行われたのは国民体育大会の折であった。戦前からサッカーの全国的な普及を目的にしていた日本蹴球協会にとって開催地が都道府県ごとに持ち回りされる国民体育大会に参加する意義は大きかった。ともあれ第2次世界大戦後の日本サッカーの復興は、全日本選手権の復活、大学リーグの復活、全国中学校選手権の復活、新たに国民体育大会の開催など各大会を通じてなされている。
- 2) 戦後日本の国際舞台への復帰は、1950年9月23日に国際サッカー連盟に復帰することにより正式に認められた。しかしメルボルンオリンピックへの出場を最後に日本のサッカー競技力は停滞し、オリンピックやW杯等のアジア予選突破がかなわず国際大会への出場はなしであった。
- 3) 戦後日本の荒廃した環境下において平和回復と国際舞台に復帰した日本は、希望を失いがちであった青少年に明るい曙光を与えるために、1964年の第18回オリンピック競技大会を東京に招致す

ることに成功した。日本は東京オリンピック強化対策本部を設置し、各競技の東京オリンピックへ向けた5カ年計画を打ち出し競技力の強化を推進していく。

- 4) 1960年、日本蹴球協会は東京オリンピック強化対策本部の指針にも掲げられていた外国人指導者の招聘に着手した。日本蹴球協会会長の野津謙はサッカーの技術を兼ね備え、日本の言語や文化の違いを考慮した上で指導者として日本人の選手を世界一流の選手に育成できる人物の推挙を西ドイツ蹴球協会に依頼した。当時ドイツ体育大学ケルンに留学していた成田十次郎の助けもあり西ドイツ西部主任コーチであったD. クラマーの招聘に成功した。日本蹴球協会は1960年8月にヨーロッパ遠征を行った。日本代表はD. クラマーが主任コーチを務めるデュイスブルグのシュポルト・シューレに滞在し、まずはドイツでD. クラマーの指導を受け同年10月にD. クラマーが来日する運びとなった。
- 5) D. クラマーの基礎技術の練習法はまず自分が実際にやって見せ、やり方を指導して、身に付くまで反復練習をさせる方法がとられていた。さらに始めは静止した状態から、次は動きながら、最後に相手のプレッシャーを受けながらといった段階的な系統指導が行われた。D. クラマーはボールコントロールをはじめとする基礎技術の習得がサッカーの戦術を行使する上で重要になってくることを説いた。
- 6) D. クラマーの考えるサッカーの戦術は大別すると基本技術と特別戦術に分けられる。彼は戦術の基礎を個人戦術に置き、1対1の状況下での個人戦術の練習から始まり、次に2対1、2対2といった具合に人数を増やしながら、グループ戦術、チーム戦術へと練習を系統的に発展させていった。彼はまた特別戦術をポジション戦術とシステム戦術に分け、各試合ごとに選手の起用を変えた。これは変化するポジションシステムの確認をさせることを目的としていた。
- 7) 東京オリンピックが閉幕し日本を離れることになったD. クラマーは、日本サッカーの発展のために「国際交流の充実」「指導者の育成」「リーグ戦の導入」「コーチ組織の結成」「天然芝グラウンドの普及」という五つの提言を残した。日本蹴球協会はこの提言を受けて、日本代表の強化を目的とした外国チームとの試合の増加、日本リーグの開幕、指導者育成講習会の開催等を手がけた。
- 8) 1968年メキシコオリンピックにおいて日本代表は、東京オリンピックの強化期間を含めておよそ

8年間D. クラマーの指導を受けてきた選手で編成されたい。D. クラマーの下で指導者の経験を積んだ長沼 健監督、岡野俊一郎コーチのもとメキシコオリンピックに臨んだ。日本代表は高地であるメキシコの低酸素に対する準備や、対戦国の分析、日本の得意とする戦術の行使に成功しめごと銅メダル獲得を成し遂げる。

- 9) 1969年7月25日から1969年10月25日にかけて、アジア諸国のサッカー指導者を対象にした第1回FIFA コーチング・スクールが開催された。FIFA コーチング・スクールの講義課程および授業時間割はD. クラマーの手によって立案された。D. クラマーは自らが日本代表に指導したように、模範を示し、理論的に指導し選手が技術習得に至るまで繰り返し反復指導を行えるような実技を多く取り入れた講習会を展開した。
- 10) D. クラマーの指導の下第1回FIFA コーチング・スクールが開催された翌年、1970年7月25日～8月24日に日本蹴球協会公認指導者養成講習会が日本蹴球協会主催の下開催された。この講習会は各都道府県協会における指導者を養成させることを目的に開催された。また各都道府県のサッカー教室等を担当する指導者として、同じく日本蹴球協会主催のもとに、サッカー・リーダー認定講習会が開催された。これらの講習会の時間割を見る限りにおいてはD. クラマーを主任コーチとして開催された第1回FIFA コーチング・スクールをモデルに開催されたことがわかる。

本稿は、D. クラマーが今日の日本サッカーの競技力向上に果たした役割について、彼の日本での活動、技術指導を中心に分析し、戦後の日本におけるサッカーの技術史の一側面を明らかにするものであった。検討の結果、日本蹴球協会はD. クラマーの「五つの提言」をもとに日本サッカーの改革を推進し、特に技術指導に関しては、従前の日本の指導にはみることができない理論をもとにしたD. クラマーの指導法を強く推奨し、D. クラマーの指導法をモデルとした指導者養成講習会を開催したことが明らかとなった。以上のことから日本サッカーの競技力の向上にD. クラマーが一翼を担っていたと指摘されよう。

6. 今後の課題

本稿は、D. クラマーが今日の日本サッカーの競技力向上に果たした役割について、彼の日本での活動、技術指導を中心に分析し、戦後の日本におけるサッカーの技術史の一側面を明らかにしようとするものであった。しかしD. クラマーのもとで開催されたFIFA コーチング・スクールをモデルにして行われた

日本蹴球協会公認指導者養成コーチング・スクールおよびサッカー・リーダー認定講習会の理論と実際についてより詳細な検討を行うことがD. クラマーが日本の競技力向上に及ぼした影響を明らかにする上で残された課題といえよう。また本稿は文献資料のみを通して論じたものである。そのためD. クラマーの指導を受けた、元選手や指導者からのインタビューをすることはD. クラマーが日本の競技力向上に及ぼした影響を明らかにする上で残された課題といえよう。

注記および引用参考文献

- 1) 後藤健生著：『日本サッカー史日本代表の90年資料編1917-2006』、双葉社、2007年、pp. 310-313
- 2) 日本サッカー協会編：「サッカー JFA NEWS」第97号、1992年7月、pp. 9-10
- 3) 後藤健生著：『日本サッカー史日本代表の90年資料編1917-2006』、双葉社、2007年、pp. 231-299
- 4) 名取祐樹：「日本のサッカー史」日本サッカー協会、日本サッカーライターズ編『最新サッカー大事典』所収、大修館書店、2002年、p. 266
- 5) 『東京オリンピック選手強化対策本部報告書』、日本体育協会、1965年、p. 301
- 6) 『東京オリンピック選手強化対策本部報告書』財団法人日本体育協会、1965年、p. 49
- 7) 長沼 健著：『サッカーに賭けた青春』、講談社、1969年、pp. 27-30
- 8) 牛木素吉郎：クラマーの五つの提案、「サッカーマガジン」第1号、1970年1月、pp. 56-58
- 9) 以下に氏名：() 内にD. クラマーとの関わり、→のあとにJリーグ開幕時である1993年当時の当該本人のサッカー界の役職を記す。
長沼 健：(東京、メキシコオリンピック日本代表監督)→Jリーグ理事、日本サッカー協会副会長
岡野俊一郎：(東京、メキシコオリンピック日本代表コーチ)→Jリーグ理事、日本サッカー協会副会長
平木隆三：(東京オリンピック日本代表選手、メキシコオリンピック日本代表コーチ)→名古屋グランパスエイト監督
川淵三郎：(東京オリンピック日本代表選手)→Jリーグチェアマン
宮本征勝：(東京、メキシコオリンピック日本代表選手)→鹿島アントラーズ監督
釜本邦茂：(東京、メキシコオリンピック日本代表選手)→ガンバ大阪監督
森 孝慈：(東京、メキシコオリンピック日本代表選手)→浦和レッドダイヤモンズ監督
- 10) 永嶋正俊：サッカーのルールと戦法の変遷について～オフサイドのルールの改訂と戦法の変遷の関係について～、「櫻門体育学研究」第5集、日本大学文理学部体育学研究室編、桜門体育学会、1970年8月、pp. 1-10
戸茱晴彦：サッカー選手のトレーニング、「体育

- の科学」第29巻第9号, 杏林書院, 1979年9月, pp.606-610
永嶋正俊: スポーツルールの改正に関する一考察〜サッカーのゴールキーパーに関するルールの変遷を中心に〜「櫻門体育学研究」第22集, 日本大学文理学部体育学研究室編, 桜門体育学会, 1988年3月, pp.31-39
菅野 淳: サッカーの練習法とトレーニング法の変遷〜国際比較も含めて〜, 「体育の科学」第52巻第5号, 杏林書院, 2002年5月, pp. 350-354
- 11) 多和健夫: 「サッカーの技術史」, 『スポーツの技術史』所収, 大修館書店, 1972年, pp.501-513
 - 12) 岸野雄三編: 『新版近代体育スポーツ年表』, 大修館書店, 1986年, p.182
 - 13) 日本蹴球協会編: 『日本サッカーのあゆみ』, 日本蹴球協会, 1974年, p.146
 - 14) 鈴木武士編: 『天皇杯65年史全日本サッカー選手権全記録』, 財団法人日本サッカー協会, 1987年, p.103
名取祐樹: 「日本のサッカー史」日本サッカー協会, 日本サッカーライターズ編『最新サッカー大事典』所収, 大修館書店, 2002年, p.260
 - 15) 財団法人日本体育協会編: 『国民体育大会50年のあゆみ』, 財団法人日本体育協会, 1998年, p.296
 - 16) 日本蹴球協会編: 『日本サッカーのあゆみ』, 日本蹴球協会, 1974年, pp.148-149
 - 17) 財団法人日本体育協会編: 『東京オリンピック選手強化対策本部報告書』, 財団法人日本体育協会, 1965年, p.44
 - 18) 中条一雄: 「日本サッカーの未来を作った人デットマール・クラマー」, 財団法人日本サッカー協会75年史編集委員会編『財団法人日本サッカー協会75年史』所収, ベースボール・マガジン社, 1996年, p.56
 - 19) 加藤栄二著: 『サッカーと対峙した男 八重樫茂生』, 三一書房, 1998年, pp.65-66
 - 20) 田嶋幸三: 日本を勝たせるスポーツ指導者の育成「体育の科学」, 第46巻第4号, 杏林書院, 2006年4月, p.280
 - 21) D. クラマー・昌谷春海 訳: 第1回クラマー講座 勝つ意思そして優れた技術を「サッカー」第7号, 日本蹴球協会, 1961年9月, p.8
 - 22) D. クラマー・昌谷春海 訳: 第2回クラマー講座 試合における二つの使命「サッカー」第15号, 日本蹴球協会, 1962年1月, p.22
 - 23) 谷釜了正, 稲垣安二: ギュンター・シュティラーの球技戦術論「新体育」第50巻第8号, 新体育社, 1980年8月, p.57
 - 24) 賀川 浩: 「クラマーとその成果」株式会社ラティオンインターナショナル編『サッカー日本代表世界への挑戦1936-2002』所収, 株式会社新紀元社, 2002年, pp.60-61
 - 25) 岡田武夫: 「日本代表全記録」, 財団法人日本サッカー協会75年史編集委員会編『財団法人日本サッカー協会75年史』所収, ベースボール・マガジン社, 1996年, pp.72-118
 - 26) 長沼 健著: 『サッカーに賭けた青春』, 講談社, 1969年, pp.171-172
 - 27) 日本サッカーリーグ全史編集委員会編: 『日本サッカーリーグ全史』, 日本サッカーリーグ, 1993年, pp.24-25
 - 28) 岡田武夫, 名取祐樹: 「日本代表 全記録」日本サッカー協会, 日本サッカーライターズ編『最新サッカー大事典』所収, 大修館書店, 2002年, p.81, p.86
 - 29) 長沼 健: 「選手選考の経緯」財団法人日本体育協会編『第19回オリンピック競技大会報告書』所収, 日本体育協会, 1969年, p.117
 - 30) 長沼 健著: 『サッカーに賭けた青春』, 講談社, 1969年, p.96
 - 31) 長沼 健: 「選手決定後の強化策および臨戦対策」財団法人日本体育協会編『第19回オリンピック競技大会報告書』所収, 日本体育協会, 1969年, pp.119-128
岡野俊一郎: 日本チームが考え, 実行したこと「サッカー」第88号, 日本蹴球協会, 1968年12月, pp.32-36
 - 32) 平木隆三: FIFA コーチング・スクール報告「サッカー」第101号, 日本蹴球協会, 1970年1月, p.13
 - 33) 平木隆三: FIFA コーチング・スクール報告「サッカー」第101号, 日本蹴球協会, 1970年1月, pp.14-15